

学生と動物実験

日本大学大学院総合科学研究科
日本大学医学部先端医学講座

泰 羅 雅 登

学部の3年生に対して、比較的自由なテーマで講義をしてよい時間があります。今年は1度しかなかったのですが、例年だと2度の機会があります。昔は（といってもそんな遠い話ではないですが）、通常の講義のなかで、自分の研究テーマについて詳しく話をされる先生がいらっしゃいました。たいていは、専門的すぎてわけがわからずポカンとしていたことを思い出す方もいらっしゃるでしょう。最近では、コアカリキュラムや、講義時間の削減といった事情から、通常の講義のなかで、自分の研究を詳しく話すことは難しくなっていました。この3年生に対する講義は、基本的には自分の研究の話をしてもいいよということでもうけられていますから、私も自分の研究の話をしていました。

縁があって、というのも変な話ですが、研究用ニホンザルの繁殖・供給を目的とするナショナルバイオリソースプロジェクト「ニホンザル」に関わるようになり、その関係で、動物の愛護及び管理に関する法律の改正、文部科学省の指針の策定という、日本での動物事件を取り巻く事情の変化も、今まで以上に人ごとではなくなりました。ナショナルバイオリソースプロジェクト「ニホンザル」では、ニホンザルの供給を受ける条件として、プロジェクトが開催する講習会の受講を義務づけています。この講習会では、日本の動物実験に関係する法律、指針、ガイドラインについて、内容

の概説はもちろん、日本ではどうしてこのような動物実験に関する法的フレームワークができあがってきたかという背景も話をしています。

さて、ずいぶん前書きが長くなってしまいました。そんなこともあって、先の学部3年生の講義で、動物実験についての話をしようと思いつき、数年前から話をしています。そして、試験の代わりに、レポートを提出させています。結果から言うと、学生のレポート、講義中の反応から判断して、話をしてよかったと思っています。

私の大学では、教養の生物でネズミ（ラット？マウス？）の解剖が実習で実験動物にふれる最初の機会です。3年生のこの時期は、いわば学生が本格的に実験動物にふれる最初の時期です。学部3年の7月頃というのは、ちょうど、生化学、薬理、生理の実習がひとわり終わるときにあたります。レポートを読むとわかるのですが、最初はとまどいを感じていた動物実験に対して、葛藤しながら（大げさかもしれませんが）実習を進めていくにつれて、ある意味、自分なりに答えを出して納得している、あるいは、ある種の無感覚（慣れ？）になっている時期にあたります。ですから、講義では、実習の際の心得を講義するのではなく、動物実験に関してのある種のメンタルケアをしてあげることができるのではないか、動物実験を取り巻く環境の様々な情報を与えてあげることで、動物実験に対する自分なりの認識、覚悟（これも大

げさかもしれません)をもってもらえればと考えたわけです

講義では、初めに日本の動物実験に関する法的なフレームワークを、なぜこのようになったのかを背景を含めて説明します。意図としては、確かにいろいろな規制はあるけれども、適正に実施すればそれは法的に認められていることを意識させることにあります。もちろん、法的に認められているからといって、動物への感謝を忘れるなどということは欠かせません。動物実験を行うかどうかの基本原則はコストとベネフィット、つまり、動物の苦痛と人類がうける恩恵、の比較で決まること、動物への感謝の念は、動愛法の基本の精神であることは強調します。ただし、法で規制をされるといことは、逆に、法で認められているということを知ってもらうことで、動物実験を行うことにある、ある種の罪悪感(道徳的なものではなく、動物を自分の手で死なせることによる刑事的?な)、もやもや感をぬぐってもらうことです。その上で、研究者ではない学生が実習で動物実験することの意義を示すようにしています。つまり、動物実験には大きく2つの意義がある(これは私の私見ですが)、1つは新しい治療法、治療薬の開発に代表される、実験結果がすぐに社会貢献に結びつく実用的な意義、もう1つは、多くの研究がそうであるように、すぐの利益には結びつかないが知識欲をみたす、知識の蓄積、100年後には実用化されるかもしれないという将来的な意義があることです。その上で、学生の動物実験には、その中間的な意義、すなわち、学生を優れた医者にするという実用的かつ将来的な意義があるという話をします。ここまでの話で、学生がおこなう動物実験の社会的位置づけを明確にしてあげること、これまでは自分の中で漠然としていた動物実験に具体性をもたせることができるのではないかと考えています。

日本で1年間に600万匹のマウスが使われています(2003年)。このことを知ることで、「そんなに!」とおどろき、実習でこんなに使って良いのかと自問している学生が、自分たちが使うマウスの数の位置づけができるようです。また、いわゆ

る動物愛護団体の活動については団体のHPを紹介しながら、考え方、活動についてかなり詳しく話をします。動物権運動と動物愛護運動は異なること、過激な団体から、研究者と一っしょになってともに考えようという団体もあること、研究への妨害は日本ではさほどではないが(実際に研究に対する妨害も行われたが、官憲のすばやい対処があったこと)、海外では、研究者の車に爆弾を仕掛けるなど、過激な妨害があること、このような運動の対象になる動物は実験動物だけではないにもかかわらず、使用数に比べてなぜか医学研究で使われる実験動物への関心が強いことなどです。また、事例はないが、動物実験をおこなう学生も決して対象外ではないことも伝えておきます。中には、内部告発を求めている団体もあるということは、たとえば、学生が通学の途中でなにげなく話したことが、伝わって大きな事件に成る可能性もあること、つまり、学生であっても、動物実験をおこなう研究者の自覚をもってほしいことを強く伝えます。その一方で、動物実験を支持してくれる、病気で困っているひとたちの団体があり、強い期待をかけられていることも伝えることにしています。

先日、神経科学学会の動物実験委員会で、学生と動物実験についての話をしていたのですが、最近の学生は、私たちの頃と、動物に対するふれあい方、考え方が違うという話がでてきました。レポート読んで思ったのは、家庭でのペットとのふれあいと関連した記述が多いことです。家庭内でペットとのふれあいがある学生が、動物実験に強いとまどいを持つことはレポートからも見て取れます。しかし、家で動物を飼っていた家庭は、今ほどは多くないにせよ、私たちのころにもありました。ここからは推測にすぎませんが、よくペットは家族との一員といいますが、現在の学生のほうが、ペットとのつきあいはよりウェットな可能性はあります。また、私たちの世代では、ペット以外の動物と遊びの中でふれあう機会が多かった、言葉は良くないですが、ザリガニつり、カエルつりに代表されるように、動物を遊び道具にする機会も多かったように思います。そのあたりの

背景が、動物への基本的な立場・心情に影響しているように思います。

とりとめのない文章になりましたが、今の学生に動物実験を行わせるさいには、彼らの動物に対する背景を理解して、私たちの世代とは違ってきていることに注意すべきでしょう。単なる動物実験の心得だけではなく、動物実験を取り巻く環境

を伝えることで、学生の中に、ある種の心構えを作ってやる、動物実験に対するある種のメンタルケアをしてやる必要があるのではないかと考えています。また、命にふれるという彼らの医者として心構えの形成の一助にもなるのではないのでしょうか。